2015.12 No.29

たてやま おらがんまっち

南総祭礼研究会

濱 館山市 那古地区

地域の紹介

那古寺から那古海岸にいたる道を、両側に挟んだ地域です。元禄大地震により、土地が隆起し、船形村名主正木九右衛門の指導により「那古浜新田」として開発され、大浜集落が形成されました。

小字名に「中浜、中入会、上入会、下入会、大浜」などがあり、開発された地区が伺えます。坂東三十三観音結願寺那古寺の門前町として多いに発展し、江戸と房州の物流の要となり、那古寺から港迄の道沿いには多くの商家、旅館などが立ち並び大変賑わいのある地域でした。鉄道の開通により、人、物の流れが変わり、昔程の賑やかさはありませんが先人から受け継いだ「浜弁財天」の祭礼文化をしっかり継承し、今も変わらず守っております。

自慢の山車

濱組山車は弁財天山車とも呼ばれ、明治四十三年に地元浜町・山口仙太郎棟梁によって新造された濱組二代目の山車です。初代の山車は明治四十五年に国分萱野へ譲渡されました。

自慢の彫刻は国分の彫工・後藤喜三郎橘義信によるもので、下高欄胴には弁財天にちなんだ安芸宮島にある厳島神社の風景他、多数の社寺伽藍が、他では見られない三面連続した構図で彫られています。中層胴には弁財天や恵比寿・大黒などの七福神、そして山車の前柱から扁額にかけては中国の伝説の故事にちなんで、鯉が滝を昇り切ったあと龍になるという「登竜門」が彫られています。また人形は弁財天、胴幕には水神ということから波と龍が描かれるなど、山車全体が関連づけられた意匠でまとめられています。

また、四メートルの角棒を使った押上式一本棒の梶棒による山車の曳き廻しも自慢のひとつ。後輪の位置が真中に寄って付けられているため、梶棒で山車前部を持ち上げて山車自体を回すこともできます。梶が切りづらく操作の難しい梶棒ですが、その伝統を守っていくのも濱の自慢です。

さらに、濱の御囃子を地に響かせるような二尺一寸の大太鼓も、濱の祭好きな人たちの大きな自慢のひとつです。

後藤喜三郎橘義信による見事な山車額周りの彫刻

安芸宮島にある厳島神社風景の彫刻

- 製作年：明治43年
- 棟　梁：浜町・山口仙太郎
- 扁　額：者満町
- 旧扁額：仲濱
- 人　形：弁財天（昭和59年新調・京都）
- 大　幕：波濤に昇り龍・降り龍（昭和60年新調・京都）
- 上　幕：しめ縄（那古地区全山車共通、昭和60年新調・京都）
- 提　灯：珠取龍の三指爪・は・三頭巴
- 半　天：背に濱、襟に者満（はま）町
- 彫刻師：後藤喜三郎橘義信

企画：南総祭礼研究会　お問い合わせ：南総祭礼研究会（TEL.090-1531-5307）